

「英語文学」の授業展開に関する一考察

—『ハムレット』を事例として—

佐々木 隆

プロローグ

筆者はこれまでの授業の自己点検を兼ねて担当授業「英米文学史」に関して「教育実践例 教材に関する学生の反応と指導—英米文学史—」(2017)、『英語文学』に関する一考察—実践例と今後の展開—」(2017)、「イギリス文化の源流・ケルト文化の取り扱いについて—高等学校から大学へ—」(2018)、「アメリカ文化の根底：『人種のるつぼ』から『サラダボウル論』—中学校・高等学校から大学へ—」(2018)、「アメリカの源流：American Indian はどう扱われて来たか—中学校・高等学校から大学へ—」(2018)、『英語文学』の授業展開—考察—『ロミオとジュリエット』を事例として—」(2019)、『英語文学』の授業展開—考察—『リア王』を事例として—」(2019)を発表してきた。

直接英米文学に関連するもの、時代背景や文化背景に関するもの、単独の作品をテーマとして取り上げたものがある。本稿もその一環であり、『ハムレット』を作品として取り上げた。

1 教職課程が求める「英語文学」の到達目標

筆者は現在、授業科目「英米文学史」、「英語文学」を担当している。ともに卒業要件科目であると同時に教職課程の科目である。なお、「英語文学」は再課程認定後の科目である。

教職課程の「英語文学」で求められているものとして、到達目標には以下が掲げられている。

- 1) 文学作品において使用されている様々な英語表現について理解

している。

- 2) 文学作品で描かれている、英語が使われている国や地域の文化について理解している。
- 3) 英語で書かれた代表的の文学について理解している。(文部科学省委託事業 10)

第3点は具体的に文学者乃至は作品を取り扱うことが求められていることになる。検討委員会で示されたコアカリキュラムは実際の教職課程における「外国語（英語）コアカリキュラム」でもそのまま到達目標として採用された。筆者はこのため、15回のシラバスのうち、英語文学の代表的ものとしてシェイクスピアの単独作品については4回を充てた。2019年度の「英語文学」（英米文学史）の該当する箇所は以下の通りである。

第5回 シェイクスピアについて（1）ハムレット

第6回 シェイクスピアについて（2）ロミオとジュリエット

第7回 シェイクスピアについて（3）リア王

第8回 シェイクスピアについて（4）マクベス

第5回でシェイクスピア『ハムレット』を取り上げているが、第4回で英文学史概略として時代背景を含め、またシェイクスピアのテーマとして“Appearance and Reality”「外見と実体」に焦点を当て、『ヴェニスの商人』の3つの箱の表に刻まれた銘文や箱の中に入っていた銘文を紹介している前振りがある。個人的に4つの作品を紹介するとすれば、『ヴェニスの商人』『十二夜』『ハムレット』『リア王』としたいところだが、作品の認知度などからすれば、上記の4つ作品が無難なところだろうか。必ずしもいわゆる四大悲劇を取り上げればよいとは考えていない。筆者がそれぞれ4つの作品に絞った理由は以下の通りである。

(1) 『ハムレット』

シェイクスピアと言えば『ハムレット』と言われるほど、代表作と言える。また、第3幕第1場の“To be or not to be, that is the question.”「生きるべきか、死ぬべきか、それが問題だ」から始まる独白はどこかで耳にしている台詞。

(2) 『ロミオとジュリエット』

実際に作品を観劇、読んだことがなくても、この作品名だけは聞いたことがある、あるいはなんとなくストーリーは知っている作品。

(3) 『リア王』

演劇好き、文学好きの学生ならどこかで聞いたことがある作品だろう。しかし、作品の認知度よりも、現在の日本の高齢社会、老後と介護、財産問題を彷彿させる作品であるだけに取り上げた。

(4) 『マクベス』

演劇好き、文学好きの学生ならどこかで聞いたことがある作品だろう。特に黒澤明監督『蜘蛛巣城』(1957)を紹介する関連から、魔女の予言の場面と、マクベスとバンクォーの戦闘のシーンに注目した。翻案をどう考えるかをメインとした。

2 独白の映像比較と学生の反応

筆者が担当している「英語文学」では「映像になった文学作品」を強く意識して全体的に進めている。その背景には筆者自身がシェイクスピア映画・映像研究に長年取り組んでおり、BBC シェイクスピアの全作品の映像をはじめ、主流となるシェイクスピア映像の VIDEO、DVD、Blu-ray を所有していることから、教材としてすぐに提供できる状態にあるからだ。本来、演劇であるシェイクスピアを教室で教えるにも限界

があり、これを補うために映像を使用していることもある。

ハムレットの独白の映像を見る前に “To be or not to be, that is the question.” から始まる独白の原文と翻訳（小田島雄志訳）を筆者が朗読して聞かせた。学生には事前に配信している教科書『2019 英語文学～英米文学を中心に～ [レポート課題等についても掲載]』（ウェブ配信）に原文と翻訳をそれぞれ掲載した。学生には全体のストーリーや細かな情報をあまり与えず、この台詞から何を感じ取るのかを重要視した。学生にはリアクションペーパーの3つの設問の3番目に「あの独白で結局ハムレットは何を言いたかったのでしょうか？」を設定した。そこに書かれたものを幾つか紹介しておきたい。

- ・自分や相手の苦悩など、自分はこれからどうすべきか迷走していたため、それを訴えかけていたのではないかと思いました。
- ・優柔不断なのかなと思いました。何か自分に言い聞かせているような “割り切れない” 心持ちを表現しているように感じました。
- ・ふくしゅうするか死ぬか自分にとって何が1番満足のできるものか。本当はどちらも納得できなさそうで、それでの迷いもあるのかなと思った。
- ・いろんな葛藤、苦しみが入り混じりこのままだと整理がつかないから自分自身にといかけて、思いなどを整理しようとした。

あまり情報を与え過ぎれば、学生の考えを誘導し、学生の率直な感じ方を抑制することになるため、敢えて独白の台詞のみを取り上げた。映像を見てからリアクションペーパーに記入させたため、映像から受けた印象もこの中に含まれていることになる。『英語文学』の授業展開の一考察—『リア王』を事例として—（2019）でも引用したが、やはり映像を有効に使うためにはある程度の情報は必要であろう。

映画やドラマのような視聴覚教材を使った場合、ただ漫然と見せていてはダメだということなのである。これは言うまでもないことかもしれないが、映像を見せる前に、こちらとしては明確な指示をしたつもりでも、学生にとって初めて見る映像である場合は指示が今ひとつ伝わらないことが多い。(新井 124)

こうした状況もあり、場面の切り取りであるが、その場面の台詞を事前に知ることでもまずイメージを持たせ、さらに複数の映像により想像力をさらに高めさせた。4つの映像について以下の通りの順番でそれぞれ観させた。

- 1 オーレンス・オリヴィエ監督『ハムレット』(イギリス、1948)
- 2 グリゴリ・コジンチェフ監督『ハムレット』(ソ連、1964)
- 3 フランコ・ゼッフィレリ監督『ハムレット』(アメリカ、1990)
- 4 ケネス・ブラナー監督『ハムレット』(イギリス、1996)



上記の4つの映像をそれぞれ時系列で見せた。当然、こうした映像は製作者が先行映画を意識しているからだ。第1のローレンス・オリヴィエ監督『ハムレット』(イギリス、1948)は『ハムレット』映画では必ず取り上げられるものであり、以降の『ハムレット』映画に大きな影響を与えたものである。独白は城の上部で行われ、その下には激しく打ちつけ

る波が印象的である。グリゴリ・コジンチェフ監督『ハムレット』(ソ連、1964)は台詞が英語ではないが、オリヴィエの『ハムレット』と同様、『ハムレット』映画では同様に必ず取り上げられるものである。穏やかな海辺で独白する。フランコ・ゼッフィレリ監督『ハムレット』(アメリカ、1990)は墓場で独白する。“to die” “to sleep” はまさに墓場にふさわしい。ケネス・ブラナー監督『ハムレット』(イギリス、1996)は省略なく、原文をそのまま使用した映画である。独白の場面は宮廷の鏡が印象的な広間で行われた。衣装もまた現代風であった。

それぞれの場面の映像を1～4の順に観てもらったあとにリアクションペーパーで回答してもらった。(リアクションペーパー実施は2019年10月8日) その問いは次の通りである。

- (1) 『ハムレット』あの有名な独白の部分のセリフを読み、映像を見ましたが、あなたはどの映像が最もしっかりと来ましたか。自分なりの順位をつけなさい。

順位は1～4で必ずつけてもらった。また、(2)として選んだ理由を自由記述で回答してもらった。

	1	2	3	4	
オリヴィエ監督	5	3	7	4	19
コジンチェフ監督	0	5	8	6	19
ゼッフィレリ監督	6	9	1	3	19
ブラナー監督	8	2	3	6	19
	19	19	19	19	

筆者の予想ではロシア語のものは敬遠され、現代風のものよりもオリヴィエ監督かゼッフィレリ監督の映像がかなり高い評価を得るのではない

かと考えていたが、その予想は外れた。では学生がブラナー監督のものを選んだ理由をいくつか紹介しておきたい。

- ・緊張感や説得力などを感じた。豪華な城の内部や衣装も印象深かった。
- ・鏡の自分に問いかけているようで独白とマッチしていた。

上位1・2だけの見ればゼッフィレリ監督『ハムレット』は78.9%とブラナー監督『ハムレット』の52.6%と圧倒的に支持されていることにも注目しておきたい。独白が心の葛藤はもちろんだが、死を強く連想させたことから、墓場を独白のシーンとして設定したところが学生の感性にあったようだ。ゼッフィレリ監督『ハムレット』のコメントでは墓場をシーンとしたことで「死」と「眠り」の台詞とマッチングしていることを指摘していた。

リアクションペーパーでは3つの質問をしていた。最後の問いは以下の通りである。

あの独白で結局ハムレットは何をいいたかったのでしょうか？

上記の問いにする学生の回答のキーワードや文章をいくつか紹介しておきたい。なお、一部の表記を正しい感じに直した。

- ・葛藤
- ・優柔不断なのかなと思いました。何か自分に言い聞かせているような“割り切れない”心持ちを表現しているように感じました。
- ・復讐するか死ぬか自分にとって何が1番満足できるものか。本ツォはどちらも納得できなさそうで、それでの迷いでもあるのかなと思った。

- ・いろいろな関東、苦しみが入り混じり、このままだと整理がつかないから、自分自身に問いかけて思いなどを整理しようとした。

全学生ではないが、学生のコメント読む限り、ハムレットの葛藤をよく捉えているよう見受けられる。もちろん、全員の学生がこのようなコメントを寄せているわけではない。

シェイクスピア劇の本質は台詞にあるが、メディア時代ともなれば、学生にとって映像は大きな力を持っている。台詞+映像+俳優の演技によりシェイクスピアの台詞をさらに引き立てた結果となった。

筆者としては独白をしている場面での海の描写、オリヴィエとコジンチェフでは具体的には「波」に注目してほしかったのであるが、この指摘はなかった。原文でも a sea of troubles があるが、これに着目はされなかったのだ。

3 本当に活字離れなのか？

大学の教育課程変更に伴い現在、文学系の科目として「英米文学史」「英語文学」「英書講読」を担当している。「英書講読」は15回の時間の中で原文で英米文学の作品を講読している。ここ数年は Oscar Wilde (1854-1900) の“The Happy Prince”と“The Selfish Giant”の2つの作品の原文で講読している。訳読ではなく、英語と日本語で Read Aloud が中心である。

「英米文学史」と「英語文学」については教育課程（教職課程再課程認定）の変更のため、現在、筆者は同時に担当している。15回で英米文学を中心に取上げた授業である。この科目は卒業要件科目としては選択である。時間割の関係もあろうが、多い時には100名近くが履修していたこともある。インターネットの時代では「ググる」という言葉に象徴されるが、グーグルで検索したり、ウィキペディアを見ればある程度

のことはわかる。しかし、ここに落とし穴がある。自分で実際に作品に触れていないために、本来の魅力に接することができないからだ。

作者と作品名を単に暗記的に覚えさせるようなことは授業の趣旨には合わない。反対に授業で単に映画を見せて終わりなどとすれば、それは悪く言えば手抜きとも言える。筆者は授業では映像を多用するが、基本的には原文や翻訳を事前に解説することに20分前後、映像を30分～40分、リアクションペーパーに30分～40分で展開するように努めている。同じ台詞の場面を3～4本の映像を見るため、部分的ではあるが集中して考えることができる。映像を利用する場合には複数であることがふさわしいだろう（石原 188・189）。

エピローグ

ゲームに夢中になる学生が多いが、そのストーリーの原点が文学作品であることは少なくない。また歴史物がゲームになっている場合には、ゲームと史実の関係を知りたくなるかもしれない。「活字離れ＝文学離れ」（佐々木 11）ではないと以前の論文でも何度も主張しているが、授業を通して文学に触れる機会は学生の教養を深め、人生を豊かにすることに寄与できると確信している。また、大学の授業でなければ、触れることのできない内容を提供することが重要ではないか、教職課程の意味合いとして人格形成にかかわる内容を扱うことがふさわしいのではないかと考えている。文学は享受する側の価値観や感性が問われるだけに、それをどう適切に表現し、相手に伝えるかが教授者、教員としては重要になるのではないだろうか。

引証資料

新井潤美（2017）。「表象文化（映画）を教える—『アダプテーション』

というコンセプト」、日本英文学会編、『教室の英文学』、研究社。

石原直美 (2013). 「映像資料とリアクションペーパーを用いた講義展開の可能性—『オセロ』のデズデモーナ殺害場面をめぐって—」、成城大学文学部学会編、風間書房。

佐々木隆 (2019). 「『英語文学』の授業展開—考察—『ロミオとジュリエット』を事例として—」、『新教育課程研究』、第9号、武蔵野教育研究会。

文部科学省委託事業「英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業（平成28年度報告）」

www.pref.osaka.lg.jp/attach/4475/00271230/eigokyoinjigyo_2950.pdf#search=%27%E6%96%87%E9%83%A8%E7%A7%91%E5%AD%A6%E7%9C%81%E5%A7%94%E8%A8%97%E4%BA%8B%E6%A5%AD%E3%80%8C%E8%8B%B1%E8%AA%9E%E6%95%99%E5%93%A1%E3%81%AE%E8%8B%B1%E8%AA%9E%、2019年11月9日アクセス。

【キーワード】英語文学、リアクションペーパー、シェイクスピア映画、『ハムレット』

『新教育課程研究』（第1号～第13号）のアーカイブ

佐々木隆「特別活動と総合的な学習の時間における人間形成の教育的意義」（『新教育課程研究』第1号、武蔵野教育研究会、平成30年1）、1-15頁

佐々木隆「集団活動の意義—校外を意識して」（『武蔵野教育研究』第3巻第16号、武蔵野教育研究会、平成30年2月）、1-14頁

佐々木隆「人間関係の構築の必要性について」（『新教育課程研究』第2号、武蔵野教育研究会、平成30年2月）、1-17頁

佐々木隆「イギリス文化の源流・ケルト文化の取り扱いについて—高等学校から大学へ—」（『新教育課程研究』第3号、武蔵野教育研究会、平成30年5月）、1-45頁

佐々木隆「アメリカ文化の根底：『人種のるつぼ』から『サラダボウル論』—中学校・高等学校から大学へ」（『新教育課程研究』第4号、武蔵野教育研究会、平成30年6月）、1-38頁

佐々木隆「アメリカの源流：American Indianはどう扱われて来たか—中学校・高等学校から大学へ」（『新教育課程研究』第5号、武蔵野教育研究会、平成30年7月）、1-26頁

佐々木隆「特別活動 部活動の取り扱いに関する動向を巡って」（『新教育課程研究』第6号、武蔵野教育研究会、平成30年8月）、1-31頁

佐々木隆「超少子高齢社会における日本の教育改革—総合的な学習の時間の果たす役割—」（『高齢社会と地域』第1号、高齢社会研究会、平成30年8月）、1-23頁

佐々木隆「主体的・対話的で深い学びとは—総合的な探究の時間の教材の考察：超少子高齢社会を背景にして」（『高齢社会と地域』第2号、高齢社会研究会、平成31年2月）、1-17頁

佐々木隆「教職課程（再課程認定）における英語学の位置付け」（『新教育課程研究』第7号、武蔵野教育研究会、平成31年3月）、1-27頁

- 佐々木隆「教育現場における外部人材の活用について」(『新教育課程研究』第8号、武蔵野教育研究会、令和元年5月)、1-19頁
- 佐々木隆「『英語文学』の授業展開一考察—『ロミオとジュリエット』を事例として—」(『新教育課程研究』第9号、武蔵野教育研究会、令和元年7月)、1-20頁
- 佐々木隆「『英語文学』の授業展開一考察—『リア王』を事例として—」(『新教育課程研究』第10号、武蔵野教育研究会、令和元年8月)、1-12頁
- 佐々木隆「学習指導要領にみる総合的な学習の時間・総合的な探究の時間における評価の問題」(『新教育課程研究』第11号、武蔵野教育研究会、令和元年10月)、1-16頁
- 佐々木隆「英語辞書に関する学生の意識について」(『新教育課程研究』第12号、武蔵野教育研究会、令和2年1月)、1-16頁
- 佐々木隆「英語教育に見る道徳的観点」(『新教育課程研究』第13号、武蔵野教育研究会、令和2年2月)、1-27頁

執筆者一覧

佐々木 隆 武蔵野学院大学教授

新教育課程研究 第14号
2020年3月15日 発行
武蔵野教育研究会 編集・発行

〒350-1328
埼玉県狭山市広瀬台3丁目26番1号
武蔵野教育研究会事務局
武蔵野学院大学 佐々木隆研究室

Studies on New Curriculum

Number 14

15 March, 2020

The Society of Musashino Education Studies